

## 自ら学びを楽しみ、生徒達の学びも支える高齢者

### <ポイント>

- ・高齢者が、用意されたプログラムを越えて学びを主体的に楽しんでいる
- ・高齢者は、子ども達の学びを支えるために、事前の準備を行い、工夫をこらすなど、大きなやりがい、生きがいを感じている。

### <高齢者がかかわる事業の概要>

長野県岡谷市では、平成12年度に市内の3地区で、モデルケース的に生きがいデイサービス事業が立ち上げられた。そのひとつとなった西堀区においては、区(自治会)が主体となり、生きがいデイサービス事業(介護予防領域での生きがい、健康づくり)が行われることになった。

「いきいきデイ西堀」の立ち上げは「手探り」で行われた。お年寄りの希望をアンケートで抽出し、メインとなる活動が決められ、その楽しみ方も利用者主導(高齢者)で確立されていった。現在は、“自然とのふれあい”、“お茶のみレクリエーション”、“趣味・料理”、“スポーツ”、“ふるさとの歴史”、“音楽・カラオケ”など8つのグループが、隔週1回集い、市から委託を受けた同市社会福祉協議会が派遣する援助員と同区で募集したボランティアに支えられながら、好みの活動などを楽しんでいる。

いきいきデイ西堀には、市内の中学校や小学校から、交流が申し込まれる。総合的な学習の施行をにらんだ体験学習の機会を求める声に応じて、岡谷市立東部中学校や同小井川小学校の生徒、児童に、いきいきデイ西堀の利用者が、暮らしの経験や知恵、技を伝えている。特に東部中学校との交流では、交流の機会に経験や知恵、技を伝えるだけでなく、1年をかけて生徒達と一緒に交流の機会そのものの企画にも取り組み、同校の文化祭で「知恵講座」というコーナーを実現させたことが注目される。



## < 高齢者が担う役割 >

いきいきデイ西堀の利用者（高齢者）は、お客さんの立場にとどまっていない。それぞれのグループの柱となる活動内容は、利用者自身が話し合いで決める（健康体操などは援助員主導で行われる）。

地域の歴史を楽しむグループでは、利用者が事前に市内の歴史を調べて資料を作ってくる。料理を楽しむグループでは、利用者が予行練習に取り組んだり材料や調理道具を手配し持ってきたりと、いきいきデイ西堀でのひとときを楽しむための主体性を利用者が発揮している。また、歌を楽しむグループが市内の高齢者施設の慰問に出かけるなど、自分たちが楽しむことを越えた活動にも取り組み始めている。

こうした利用者の前向きな姿勢が、彼らを支えるボランティアをして、「ああいう年の取り方をしたい」「人生の先輩に学んでいる」と言わしめている。このように、これから地域で高齢期を過ごす年齢層の住民に、一種のロールモデル（役割の見本、目標）を提供していることも注目される。

いきいきデイ西堀の利用者は、すでに触れたように東部中学校との交流でも活躍している。例えば、戦争体験の語り部として招かれた利用者は、事前に原稿を書き、与えられた時間内で話せるよう準備を行っている。また、学校側が用意した機会に出向くだけでなく、生徒達にアドバイスしながら企画立案に参画するなど、交流の機会の運営にも、主体性を発揮している。

## < 獲得される生きがい >

ここでは、東部中学校との交流で活躍する利用者（高齢者）の様子や、いきいきデイ西堀で利用者の様子を見ているボランティアや西堀区のキーマンの声を通して、どのように生きがいが獲得されているのかに触れてみたい。

西堀区のキーマンとして運営を支える新村さんは、ふるさとの歴史グループのメンバーが、自分が発表するための資料を作ってくるという「思いがけない」展開を、「私もたまげてしまって、一部くれや、



とお願いしたんだ」と振り返る。趣味・料理グループでは、仲間に教えるには、と2回も事前に練習をして望むメンバーもでてきた。こうしたメンバーに、疲れただろうと、指圧で労をねぎらうメンバーも。

実は、と前置きしながら、新村さんは、いきいきデイ西堀に参加してくれたお年寄りが「こんなになるとは思わなかった」と語る。「そのうち嫌になるかと思っただ、ものすごい張り合いを持ってやってくれている」のは、「東部中との交流がひとつの理由になっている」とも。

こうした新村さんの言葉を支えているのは、いきいきデイ西堀に参加するお年寄りやその家族からの言葉だ。いきいきデイ西堀に参加して「テレビばかり見ていたうちのじいちゃん、ばあちゃんに張り合いがでてきた」、「知恵講座の講師となれば、張り切って勉強している」という声が寄せられたことを「非常にうれしい」と話してくれたボランティアもいる。戦争体験など話そうとしても家族が聞いてくれない。そんな話を知恵講座では喜んで聞いてくれるから「母ちゃんを前に置いてリハーサルをやっちゃった」という話をお年寄り自身から聞くこともできる。

新村さんは語る。お年寄りは話したがっている、伝えたがっている、自分の経験を、と。知恵講座は、その想いを現実のものとするができる場であった。それは、単に何かを話せる場ではない。生徒が、高齢者の経験、あえて言うならば、すでに日常生活の中では評価されなくなった自らの経験やそれに基づいた知識を、大切なものとして、そこから何かを得るという姿勢で学ぶ場であった。だからこそ、東部中学校との交流が利用者の生きがいづくりに結びついた、とキーマンやお年寄りの笑顔が教えてくれた。

### < 生きがいの獲得を支える仕組み >

最後に、利用者（高齢者）達が、上記したような生きがいを獲得することを支えている仕組みについて、キーマンの声を借りてまとめてみたい。

新村さんは、「いきいきデイ西堀を太らせる枝葉は、つけようと思えばいろいろなものをつけられる」と言う。新村さんは、交流をこうした枝葉(の最大のものの1つ)ととらえている。だからこそ、交流の成果を認識しつつ、また、その拡大の容易さを感じつつ、「お年寄りが疲れてしまうことでは本末転倒」と「いろんな学校で必死になっている総合的な学習に」容易に引っぱり出されることのないように「注意している」のだと教えてくれた。

こうした新村さんの言葉からは、高齢者の経験や知恵、技が発揮され、生きがいにつながる仕掛けとしての交流の意味が浮かび上がる。